

エル・サルバドル (1)

ベリー・ファリーナさん



右端がベリーさん

エル・サルバドルは、中央アメリカに位置する小さな美しい国です。北はホンデュラス、南は太平洋、そして西はグアテマラに囲まれています。1年を通して気温は17度C～26度Cと過ごしやすく、また5月から10月は雨季、11月から4月には乾季になります。

国の通貨はコロンですが、実際にはドルが流通し、商品の価格表示や人々の買い物もドルで行われています。しかし、かなりの人はまだ物価をコロンで計算する習慣が残っています。公用語はスペイン語ですが、以前は様々な先住民の言葉が話されていました。今ではそれらの言葉を話す人はほとんどいない状態です。

エル・サルバドルは、その地理的位置から南北の掛け橋の役割を担っていました。中でもマヤ族は、はかりしれないほどの文化的遺産を残しています。スペインが征服する以前に、ナワ族がこの地に移住し、マヤ文明の影響はほとんどなくなりました。エル・サルバドルには、ナワ・ピピル族、レンカ族、そしてカカオペラ族という主に3つの部族が住んでいました。中でもナワ族はもっとも影響力を拡大した部族でした。歴史的な背景から、スペインによる征服が始まり、これらの部族は詐欺され、孤立し、悲惨と極貧のなか、ほとんどが根絶してしまいました。現在では、部族の言語は国家遺産の一部として尊重され普及すべく憲法で保護されています。しかし、これらの言葉は絶滅したに等しく、現実的には憲法による保護が必ずしも反映されているわけではありません。国家から公用語として、また部族として、その存在が認められていないのが事実です。

地名には、ナワ族の言葉が数多く残されています。たとえば、エル・サルバドルは、かつてナワ族の言語で「宝石の地」を意味する「クスカタン」と呼ばれていました。

エル・サルバドルには考古学で興味深い場所が数多くありますが、中でも著名なのは1993年にユネスコの世界遺産に指定された「セレンの宝石」という場所です。セレンの宝石はマヤ族の小さな定住地で、約1400年前の噴火により灰に埋もれてしまったところでした。今だに当時の家々の残骸が完全な状態で残っており、かつてそこで暮らしていた人々の生活様式を知ることができま

す。同様にサン・アンドレ

スやタスマルもマヤ族が住んでいたところとみられています。エル・サルバドルには、イサルコ火山、サンピセンテ火山といった火山もたくさんあります。また、ツチトトやパンチマイコといった昔の植民地時代の面影が残っている村も多く残っています。

食べもの：もっともポピュラーな食べものはププサと呼ばれるもので、とうもろこしあるいは米の粉を水で練って、その中にフリーホール（豆をこした物）やチーズ等を入れて平べったくした上で、鉄板で焼いたものです。

エル・サルバドルは長いあいだ内戦が続き、多くの同胞が恐怖や死に追いやられました。しかし、1992年に内戦が終了し、現在は国の発展を目指して努力しています。厳しい内戦を経たにもかかわらず、国民は親切で、人々をもてなす心を持っています。生活のために仕送りをする目的で、家族の一員がアメリカに出稼ぎに行き（決死で出国、または詐欺されることを覚悟の上）離ればなれに暮らしている家庭が多くありますが、多くの人が米国に入国する前に途中の国境で捕まり、本国に強制送還されたりしていることも事実です。

このような小さな国でも、残念ながらマラスという集団による犯罪が多発し、社会問題になっています。マラスとは、貧困などが原因となり、少年たちによる反社会的な集団が集まってできたもので、日々多くの人達の生命を奪い、特に、敵対するマラス・グループどうしの抗争が絶えません。

また、日々、交通事故で命を落とす人が多く、そのほとんどがスピードの出し過ぎや軽率さが原因とされています。

日本の桜の木に似てピンク色の花を咲かせるマキリッシュワットという国木をはじめ、一年中黄色、オレンジ等さまざまな美しい花が咲き、この国の景色を彩っています。この郷愁に満ちた風景の中、色鮮やかな鳥たちが庭に訪れます。時には国鳥のトロゴスが姿を見せて、いやなことを全く忘れさせてくれるかのように、夕暮れの平和な静寂と美しさで身を包んでくれます。